

洞田の池



洞田の池

ええ、ええ、ございましたとも、それはそれはやさしい池でございました。

あの池が埋められましてから、かれこれ七、八年にもなりまじょうか、池のはたには、春先きになりますと白いばらの花が一面に咲いておりました。それが過ぎますと、これまた沢梨の花がかき氷でもまき散らしたように、美しゅう咲いたものでございます。

そのうえ、まわりが百間（二百メートル）あるかなしのあの池のあたりには、朝も夕ぐれもほーっともやがたちこめまして、池のはたに立っておりますと、まるで池の底にでもおるような気がしたものでございます。

そんな静かなあの池が、若いおなごを何人もんだなぞ……と、とても思いとうはございません。

それでも最後に身投げしたおなごは、わたしの身内の者でございまして、毎年、あの娘の命日になりますと池の跡に花をたむけて冥福を祈っております。

ええ、ええ、ほんにむごうて……。

あの娘はいたって気立てもやさしゅう、おまけに器量よしで、村の若い衆なんぞは、あの娘に近こう寄って話するものはじらうほどでございました。

それがどうしたとか、あの娘は、最初に池に身投げしたおなごとそりやよう似とつたと言われているのでございます。人の口に戸をたてることもできず、身内の者は、みんな、「そりや何かの因縁かもしれない……。」と、そう思っているのでございます。

へえっ、あの最初に身投げしたおなごのことでございますか。わたしも若いころにおじいから聞いたのでございまして、ようは知りませんがお話してみましよう。

ずつと昔、この村に小平次という評判の働き者がおりまして、氏も育ちもよかったもので、この村のもんはもちろんのこと近在のお大衆衆までも、としごろの娘をもつもんはみんな、家の娘を小平次の嫁にしたいと、心うちで思っておりましたそうでございます。

ところが、そんなある日小平次がいつものように仕事を済ませてあの池のはたを通りかかりましたと、池の面に、すうつと娘の姿が映っているではございせんか。

はつとした小平次はその場に立ちどまり、顔を上げてわきを見ますと、そばの沢梨の木に寄りそうて、見おほえもないひとりの美しい娘ごが、池の面を見つめていらっしゃいます。

小平次はとっさのことに声をかけるのもようせず、ただ、沢梨の葉からこぼれるあわい光が娘ごの肩先きにゆれるのをじつと見つめておりました。

そのうち小平次は、われにかえって、

「おまえ、この村の。」

娘に向かつて言いかけますと、娘はそのことばをさえぎるように首を横にふるのでございます。

「あけの日も、その明けの日も、この池のはたで、おれは、おれはおまえを待っておる……。」

若者がこころのかぎりことばをつづけますとおなごは、ぼーっとほおを染めて、それでもうれしそうにならずいたのでございます。

それからというものは、ふたりはこの池のはたへ来ては、人目を忍んで会ったのでございませう。

池ばたにアヤメの咲くころには、ふたりはもう、たがいに、はなれられんようになっていたそうでございます。

けれども「ま屋の違ひは不練のもと」はたの者はふたりの間隙を許すはずはございません。でも、もしやのことでもあってはと、不承不承夫婦にさせたのでございます。

こうしたわけで、それからのおなごに向けての仕打ちは、それはそれはきつうて、むごい目に合わせたものでございます。

折りも折り、その年ほどこの田んぼもたいそう不作でございました。

「地の敷を嫁にせんと、ろくなことはおこらん。」

家の敷も、はたのものまでもみんな、つれそう若者にまで、ことごとにつろう当つたのでこ

ざいます。

そうなる人間というものは、かなしいものでございまして、とうとう若者までが手前の嫁に口をきくのははばかるようになったのでございます。おなごが水車小屋にひとり寝るようになったのもそのじきあとのこととございました。こおりつくような寒空に、水車のまわる音にまじって、おなごのおしころしたような泣き声が吸いこまれていった幾夜さが続いたそうでございます。

そして、おなごはあえなく池に身を投げたのでございます。

そりやもうかくこの身投げでございました。池のはたに、はいて来たぞうりをそろえ、その上に朝夕髪をすいたツゲの櫛がすえてあったそうでございます。若者へのせめてものかたみだったのでございましょう。そしておなごの両の足首は、小平次の腰ひもできっちり結ばれていて、まこと美しい死に顔だったそうでございます。

それからでございました。あの池が娘の命をのむようになりましたのは――。

しかも、どの娘もどの娘もみんなきまってどことなしあの娘に面ざしが似通うた娘ばかりだったそうでございます。

「あのおなごは、よっぽど小平次が好きじゃったんじやろ。それで小平次をだれにもとられとう

のうて、自分に似かような娘をみんな池にさそうのじやて。」

村のもんは、しあわせうすかったあの娘をそうあわれんで、おじぞう様をこさえておまつりしたのでございます。

それは、文政七年正月のことだったそうでございました。

松井文子